

語り継ぐ、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう



冬仕度に出番あり。

野山の紅葉が始まり近くの高山に雪のたよりも届く頃になると、我が家の一大イベントが待っていました。冬囲いやストーブの準備に出番はなかったけれど、障子の貼り替えには進んで手伝ったものです。何よりもズボズボと穴を開けて破くのが楽しかった。はしやぎすぎて棧を折ったり、急いで文房具店に障子紙を買いにやらされたりなんてこともありましたね。霧吹きの大役もドキドキしたでしょう。「障子洗う」「障子貼る」といった秋の季語があるくらい生活に根ざした習慣ですが、北海道ではことさら春への思いがこもっていました。今、お宅に障子がありますか。

ひと街ごと No. 29

- ・時の街角／旧岩間家農家住宅——2
- ・マチの博物館／浪漫屋II——3
- ・あるはむレトロボリス／創成橋付近——4
- ・川筋を行く／豊平川①——5
- ・来た道行く道／工房北総——6
- ・道具で道草30年——7
- ・時計のある風景——8

二〇〇九年 秋(全四回)発行

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1159

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産協会館四階
(編)編集工房海内 TEL(011)633-1651



時の街角

北海道開拓の村から

断熱や気密化の技術が進歩して
今日では一般住宅とほとんど変わらない農家住宅。
開拓当初の暖も満足に取れなかった掘っ立て小屋から
どのような変遷をたどったのでしょうか。

本道開拓の礎となった伊達地方人植者の遺構です。

重厚、堅牢、漂う風格 郷里の大工招いて建築。

旧岩間家農家住宅

明治十五年（一八八二）建築

明治維新後、北海道開拓に大きな
役割を果たした結社入植や屯田兵と
ともに、今日まで足跡を残している
のは東北土族の功績です。よく知ら
れるように、幕府に抵抗して戊辰戦

第三回目の移民団の一員として、翌
明治四年二月に現在の伊達市弄月
町に入植し、開拓に当たっています。
体験したことのない過酷な気候に、
道内のどこの入植地も思うように作

争で敗れた奥羽越の諸藩が、家臣を
養つていくために、新政府に北海道
移住を願ひ出たのでした。

仙台藩亘理領（宮
城県仙台市）の領主
伊達邦成とその家臣
団一行が、有珠（現
在の伊達市）に移住
したのは、明治三年
（一八七〇）四月の
こと。この建物を創
建した岩間弥之助は、



炬を切った茶の間上部のヤチダモの小屋組みに重厚感がある
他にも欄間や障子に北海道には見られない細工が

※参考文献 北海道開拓の村・開村10周年記念誌



業が進まなかった中で、この地方は
温暖な気候に加えて、すぐに西洋式
農機具を導入したことなどから、農
業先進地になっていきました。
従つて起居する住まいにも早くお
金をかけられるようになったのか、
展示公開されているのは二軒目の家
屋で、明治十五年（一八八二）の完

成とされています。それ以後、五代
にわたつて昭和五十二年まで使用さ
れていました。

郷里の大工を招いて建てられただ
けあつて、構造など随所に特徴があ
りますが、やはり目を見張るのは、
炬を切つてある茶の間の小屋組み。
太いヤチダモを井げた状に組んだ、
重厚で堅牢なものです。

この土間や流しと一体になった茶
の間が建物の左半分を占め、右側に
中座敷、奥座敷など四つの座敷があ
ります。旧領主が視察に来た際に休
む奥座敷には風格が漂っていますし、
欄間や神棚の細工なども手が込んで
います。



また茶の間の煙出し、雨が降
つてもすぐ乾くようにと床板が外へ
向けて傾斜した雨転がしと呼ばれる
縁側も珍しいでしょう。枳葺きの屋
根の石置きは仙台地方の農家にはみ
られないもので、こちらで噴火湾か
らの風に配慮した知恵のようです。
民家のつくりとくまろ融合した、
ユニークな農家住宅です。

農家住宅とはいえどっしりとした構え
屋根の突出部はいろいろの煙出し
枳葺きに置き石というのも珍しい

古布と布の手仕事
浪漫屋 Ⅱ(南一条店)
 札幌市中央区南一条西六丁目三三三ビル四階
 電話〇二六八二六〇八八(全日通話可)
 営業/木・金・土・日・十二時〜十八時
 定休/月・火・水

古くなつたものが簡単に捨てられていく時代です。和服を着る人が少なくなつて、布もまた例外ではありません。その古布たちに再び命を吹き込んで世に送り出す布にはまったく関心がなかったという元OLの店

古布に再び命を 吹き込んで

私たちが徐々に忘れていく感覚の一つが手触り。金属やプラスチックなどどれも同じつるりとした感触です。でもやっぱり触ってやさしいものは、目にもやさしい——こんなことを改めて感じさせてくれる、古布と布の手仕事の店です。

布といえば、原料で分けると絹、毛、麻、木綿など。織りでなら緋、縞、縮緬。そして染め方ではと数限りなく種類のある古布を、バッグやポシェット、ベスト、



ブックカバー、タペストリー、のれん、オリジナルアクセサリーなど、様々な商品にリメイクして販売しています。

オーナーの伊藤美恵子さんによりますと再生する古い着物や布の年代はまちまち。「おばあちゃんが明治時代に着ていたというものもあれば、模様から判断して江戸時代と思われるものも」。大切なのは時代より「加工していいものになるか、着心地がいいかどうか」だそうです。布製品のほかに目立つのがボタンとス



裂き織り機に向かうオーナーの伊藤美恵子さん。仕事着もオリジナル

ナップ。特にボタンは水牛、貝、クルミ、ガラス玉、石の玉など見るだけでも楽しいものが一杯です。他の年代物の雑貨類も含めて骨董屋さながら、「病氣です」(伊藤さん)というほどのコレクション。

見て触って味わう草木染め、裂き織りの風合い



般若心経にユーモラスな鬼の絵カヤで作ったのれん

本州や東南アジアへの収集旅行も少なくありません。

さらに伊藤さんのお得意は、草木染めと裂き織り。柿渋、クルミ、月見草、



ボタンや古布に思わぬ掘り出しものが見て回るだけでも楽しい

比較的年配の女性客が多いのですが、伊藤さんは「若い人にもいきれを触ってみてほしい。触らないとよさがわからない」と呼びかけています。最後に「古い着物は捨てないで」と。



草木染めの糸やひも類

クリ、ドクダミ、タマネギ——化学染料によらない染色は、「雑味がとてもいいんですよね。不ぞろいにも味があるし、微妙なグラデーションも素敵」(伊藤さん)。そして裂き織りとは、麻や木綿の手染め糸を縦糸に、裂いてテープ状にした古布を横糸にして手織りしていく技法で、手作りの風合い満点のリメイク。実は伊藤さん、もともとは布にはまったく関心のないOLだったとか。失職中にアルバイト先の骨董店の主人から、本州では古い布の需要があり競り市まであるという話を聞き、三

十歳の時に札幌市内のデパートに二坪の店を開いたのがスタート。それから移転、拡充を重ね、手稲区富丘の本店に続いてこちらが八軒目の店なのです。

都心のビルの4階店の入口の目印



骨董店のようなコレクションの数々



西一丁目たもとにあった南一条交番。市電の架線も見える(昭和40年)

90年代はまだまだ昔の面影が残る橋の下のアーチも見える(平成5年11月)



あるばお レトロポリス

創成橋付近

創成川ほどその姿を変えた川はない。特に都心部では——
こんな感想を持っている人は多いことでしょう。
実際、現在行われている工事が何のためか知らない人も。
そこで創成橋のことなど思い出しながら、将来図も。

都市化の波にさらされる 札幌の街づくりの基点。

川と橋はどちらが先に出来るかといえど、もちろん川が先に決まっています。創成川は例外？ こんなことから始めましょう。

札幌市内の小学生なら誰でも知っている大友堀。幕府の役人だった大友亀太郎が慶応二年(一八六六)、札幌村(現東区)を開く時に造った用水路です。その大友堀の南一条通りに架けられていた、丸太に板を渡しただけの粗末な橋に、岩村判官が付けた名前が創成橋。同四年に用水路を改修した時のことです。

その後、石狩との舟運の拡充を図るため、明治七年、大友堀を延長して完成した水路に、創成橋にちなんで創成川と命名されたのです。創成橋は、そのたもとを基点にして札幌の東西南北の区



東側たもとから中心街方向(昭和53年11月)



東側たもとからテレビ塔方向(昭和59年9月)



左が「札幌建設の地」碑
右が創成橋の親柱石

画割が行われたところでもあり、歴史的に由緒ある橋。市民にはまだ記憶のある、欄干に擬宝珠のある石造りの橋になったのは明治四十三年(一九一〇)。橋の下がアーチになっていたことも特徴的でした。

橋と同時に懐かしいのが、西一丁目にあったレンガ造りの南一条交番。

橋も交番も今はどこへ、ということですが、橋は「創成川通アンダーパス連続化事業」という名称の工事のために、現在は撤去されています。今年三月、南北に分断されていたアンダーパスがつながりました。地上部の完成は二十二年度とか。創成川



南一条交番は北海道開拓の村に移築

工事中の創成川通一带橋もいずれここに復元

はそれまで地下を流れています。橋のたもとに、「札幌建設の地」碑と並んで、かつての創成橋の親柱石が立っていますが、金ぴかの擬宝珠がちよっと寂しげ。創成川が親水空間として生まれ変わり、橋も復元されるまでの辛抱でしょう。また南一条交番は現存する数少ないレンガ造の建物として、北海道開拓の村に移築されています。都市化、それも二百万人という規模へ膨らむ大都市に、貴重な歴史遺産を消し去ることなく守ってほしいものです。

豊平川

河川敷の利用

人を引きつける空間、 今も昔も「心の河原」。

川と人がどれほど親しい関係にあるかは、河川敷の利用度でもわかります。札幌市中心部の豊平川沿いを歩くと、スポーツや遊び場の多いこと、季節のイベント広場としても定着しています。

河原と河川敷はどう違うのか。百科事典をひもといてみますと、河原は古来、神の集う広場と考えられ、けがれを清める場所だったそうです。歴史的には、宿場や葬送、芸能興行、涼みなどの場所としても利用されてきました。



イカダ下りは今年で35回、各チームの扮装も楽しい。(札幌市写真ライブラリー提供)



フィールドとなっています。このほかにもウォータージェットやサイクリングコース、ローリースケート場、自由広場などがある。

一方、河川敷は、治水工事が行われた河川の、通常は水が流れていない平坦な土地。本来は公有地であるべきで、近年は、公園や緑地を確保できない都市では、河川環境整備事業が促進されている――と。

こうしてみると、河原の一部が河川法という法の下で河川



土曜、日曜ともなれば少年野球のメッカに早変わり

川筋を行く

人と川の様々なかわりをたずねて

敷に変わる、人と川をとしての役割は古代から変わっていないといえるようす。今、都心部にある豊平川緑地の左右両岸のスポーツ施設を挙げ

りますし、白石区東米里の豊平川雁来健康公園にもテニスコート六面とゴルフコース・練習場が整っています。

そして季節恒例のイベントとして定着しているのが、夏のイカダ下りと花火大会。イカダ下りはすでに三十五回を数え(今年は増水でセレモニィのみ)、各チームの趣向を凝らした扮装が見もの。また花火大会も毎年大勢の見物客を集め、盛夏には欠かせない行事となっています。



子供たちに大人気のウォーターガーデン。夏は終日、歓声の絶えることがない



日常的な散歩やジョギングも含めて、豊平川はこのように実に身近な存在です。しかし忘れられがちなのは、豊平川の流域面積が小さく、流れが急。集中的に多雨にも見舞われるという「あまりにも日本の河川の特徴を顕著に示している」(さっぽろ文庫4「豊平川」)こと。

いつの時代も河川敷が「心の河原」であり続けるには、災害への注意も怠ってはいけないということでしょう。

来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦他薦を
お待ちしております。

店名や商品名を示す看板。その面白さに引かれて店の中をのぞいてみるのがあまりなくなつたのは、印刷したシートを貼り付けただけの平らな看板が多くなつたからでしょうか。

トタン板にペンキで絵や文字を書く看板屋が見られなくなつた時代に、木の手彫り看板を作り続けている「工房北絵」の火ノ川隆市さん(五)です。看板制作に欠かせない塗装を覚えてからこの道に入り、三十一歳で独立しました。木との付き合いは、二十歳を過ぎた頃に始めた木版画がきっかけ。時間を見つけては鎌倉や日光、京都などを歩いたりして、独学で木彫りの技術を磨いてきました。

「金沢に行った時に、老舗なのに看板がきれいに保たれている。聞いてみると木は古いけれど、定期的に金箔を貼り替



研いで使ううちにこんなに短くなった

えたりしてメンテナンスをちゃんとしてやっているんですよ。看板をほんとに大切にしているんだね。看板へお世話ありがとうございました」と火ノ川さん。こんな木の看板への思いが、今では手彫り看板だけでなくレリーフや表札、ピクトサイン(案内板)、創作小物へと仕事の幅を広げています。

その技法の一端をうかがってみると、文字を浮き上がらせる浮かし彫り、文字の表面を盛り上げるように彫るかまぼこ



木版画から出発して30年かたつ火ノ川さんの手彫りの技法彫り方と素材に合わせて使う彫刻刀もいろいろ



かまぼこ彫りによる看板※

工房北絵
札幌市北区新琴似5条13丁目5-3
TEL (011) 765-0402
<http://www.k5.dion.ne.jp/~hokue/>



上/かまぼこ彫りの制作例※
下/様々な表札もお手のもの



板を切り抜いて面加工して塗装※



サンドブラストエッチングによるウェルカムボード※
(※は火ノ川さん提供写真)

「技の引き出し」多彩。 木の看板づくり、 手彫りを貫く。

火ノ川隆市さん——札幌市・工房北絵



使います。また細かい砂を吹き付けて彫るサンドブラストエッチングもお手の物ですし、カラー塗装文字も。

看板制作で大事なことは長持ちしなければいけないということ。そのため素材と塗料の組み合わせに注意を払います。特に塗料については、インターネットなどで新製品を手に入れては試作品を作り、屋外に長期間放置

上は屋外に放置しての耐候実験サンプル。下はオリジナルのメールボックス



彫り、鋭角に彫り込むV字彫りなどが。道具も彫刻刀だけでなくノミやカンナもしている。そして耐候実験です。塗装は火ノ川さんの得意分野。「絶えず実験していかないとお客さんにも説得力がない」と言い、事務所にはこうした情報のファイルと作品の見本が一杯です。

できるだけ技法の引き出しを多くしておいて、いろいろな注文にこたえていこうという意欲の一方で、需要は安価な素材や方法で済ませる方向に。デジタル化も進んで、三次元の彫刻機も登場しているとか。でも「自分は手彫りを続ける。究極のエコなのです」と火ノ川さん。木を熟知した職人の言葉には重みがあります。

道具で

道草30年

久しぶりに会った大学時代の恩師はかくしゃくとしていた
その先生が読めと勧めてくれたギリシャの古典二冊
神田の古書店でなければならぬ金をはたいて求めた青春がよみがえる

坂一敬

恩師と会って

思い出した

「これを読め」。

読むだけの価値はある。金をためて買いに来ようと思つた。それぞれ千八百円、千三百円もしたから。

ある日、友が私に言った。「先生、

お前のことをほめていたぞ。このあいの試験、トップは東洋英和から来たあの子だ。なんせ、一日も休まずいつも一番前で聞いているから当然か。でも、次はお前だぞうだ。」

ちよつぱり嬉しかった。それは二冊で三千百円払ったかいがあったというだけではない。友を「ボニー」(明治大学前にあった喫茶店)に誘い

「今日は俺が出すわ」そう言つて一杯五十円(その頃コーヒは五十円が普通)のコーヒを飲んだ。舌に染みる甘い味であった。

当時、学校の行事が終わった後など学生と先生が肩を組んで、よく歌



古典2冊と母校の前にあった喫茶ボニーのマッチ

を歌った。でも、その輪の中に決して入つてこない先生方もかなりいた。その訳を聞くと「私の母校は帝大です」という答えが返つてきた。でも先生はいつも我々と肩を組んで校歌を歌つてくれていた。

運動が激しさを増し、先生とお会いすることは少なくなつていった。

ある日、私は皆を引き連れ、隊列を組んで車道をデモつていた。すると向う側から、髪をオールバックにし、紺の背広で黒の重そうな皮靴をかかえた先生が、歩道を歩いてこられた。私はすぐに先生とわかつたのだが、先生は私に気づかずにすれ違つて行かれた。ヘルメットとタオルで顔をおおつていたので無理もない。心の片隅で、先生とはぶつかり

たくないなと思つた。

更に運動が激しくなつた頃、先生は大学をお辞めになつて、我々の前から去つて行かれた。詳しい訳は知らない。でも帝大出の主任教授と

しつくりいかなないせいといううわさが流れていた。

大学で多くの先生方の講義を聞いた。今、その内容も先生方の名前もまったくといっていいほど覚えてはいない。しかし、先生が学生の頃から住んでおられたという、あの木造三階建てのいずみやという名前下の宿。本が廊下まではみ出し、周りの人から床が抜けるのではと心配されていた汚く、乱雑な室内。それはなぜかはつきりと覚えていて。子供の頃ヤギを飼つていて、そのヤギが死んで悲しかったと話すその顔も、そしてもちろん、先生の名前もフルネームで覚えている。

昔、テレビの番組で、おそらく八十歳は越えているだろう数人が出ていた。その中の一人が、小学生の頃、先生が自ら作詞して教えてくれたという歌をフルコーラスで披露した。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

先生とはぶつかりたくないなと思つた。

※石川啄木のファンである筆者は、今でもこの先生を啄木(本名:石川一)だと思つているそうです。

からくり時計は どんな音？

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

からくり時計の悲しさは、その楽しい仕掛けが広く知られていない限りは、丁度その場面に居合わせていなければどんな工夫が施されているのかわからないということでしょう。駅といえば時刻表示のたくさんある場所。中でも最も人の動きの激しい改

札口で、このSL時計の音色を知っている人はどのくらいいるでしょうか。定時になるとかわいらしい人形がロンドンフィルの伴奏で棒鈴を演奏し、SLのヘッドライトに明かりがともります。今度の札幌駅での待ち合わせは、からくり時計の前で――。



Now Printing

●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

質問箱

本づくりの「？」にお答えします。
お気軽に質問をお寄せください。

Q 文章を書くのは苦手なのですが、どうしても両親と我が家の歩んできた歴史を本にまとめたいのです。よい方法はありませんでしょうか。先祖は東北からきたということもあり、ルーツを一緒にできたらと思っています。

書けないけど本を作りたい

A 先祖が道外から移り住んできたという道産子は多く、世代としては五代目、六代目の時代になっているお宅もあります。そんな一家の歴史をまとめることはとても意義深いものです。さて、自分では書けないけれど本を作れるかという質問です。答から

言いますと、どんな本でも可能ということになります。自分や身内に書ける人がいなければ、外部のライターに依頼すればよいのです。

やり方としては、どういう内容のものを作りたいのか全体像を決めます。その後、自分史年表、我が家史など必要な資料をそのライターに提供して、様々な補足質問、インタビューを受けることになります。古い写真も役に立ちます。それを整理、原稿にしたものに、依頼主が目を通してチェック。何度かの修正、補完を行っていきます。

本人、家族、親戚など出来るだけ多くの人と会ってもらえば、より中身の濃いものになりますし、家族史だけにしても十分に記念になるものが可能です。まずは印刷会社に連絡して、中身、方法を打ち合わせてみることをお勧めします。

居間で本づくりセミナーを

自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただければ、日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。

記念誌は未来への道しるべ

企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています

慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたく願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。